

エリザベスとオリバーはなぜ結婚したのか  
— 『開拓者』における結婚の意味—

飯島 昭典

## はじめに

偶然の出会いから始まる恋。それは事件かもしれないし、突然の怪我かもしれない。多くの人々がそうした状況にあこがれ、そしてそういった場面を想像して心躍らせることであろう。私たちが生きる21世紀の世の中でさえ、恋愛を扱う多くのドラマ、小説、映画は偶然によるきっかけづくりを重要視している。ジェイムズ・フェニモア・クーパー (James Fenimore Cooper, 1789-1851) の描く『開拓者』 (*The Pioneers*, 1823)<sup>1</sup> はアメリカロマン主義のはしりの時代の長編小説であるが、この小説においても偶然という要素は、作品を解釈する上で重要な意味をもっているのである。もちろん、『開拓者』はラブロマンスを作品の主題としているものではない。クーパーは小説家という顔の他にも歴史家という顔もあわせ持つのであり、この作品は彼の考える歴史観が強く表現されている。彼の出世作である前作『スパイ』 (*The Spy*, 1821) と同様に当時の社会情勢を反映した内容となっている。

はじめに男女のロマンスについて言及したのは、意味あつてのことである。この作品では、オリバー・エドワーズ (Oliver Edwards) とエリザベス・テンプル (Elizabeth Temple) という若い男女の結婚が、作品中で語られているが、私はこの二人の結婚が作品解釈に必要な要素であると考えている。カイ・ハウス (Kay House) は「クーパーはそのような恋人たちの恋愛ごとにはほとんど興味をもっていなかったようだ」 ( “ Cooper himself seems to have had little interest in the affairs of such lovers ” ) (22) としており、作品の恋愛要素は二次的なものであると考えているようである。しかし、私はこの考えに真っ向から反対する。『開拓者』論の展開には、男女の恋愛なくして説得力ある議論は出来ないはずである、と信じるからである。オリバーとエリザベスの結婚はけっしてサブプロットの要素ではなく、作品のテーマに

深く関わってくるものである。

作品をオリバーとエリザベスの結婚の観点から研究している批評家にシンジ・ウェジェナー(Singe Wegener)がいるが、彼は次のようなコメントを行っている。

. . . in the end Cooper's merger of the model gentleman, Oliver Edwards, to the lady, Elizabeth Temple, seems his only solution for role models of the new democratic America. (7)

・・・結局、クーパーの描く典型的紳士のオリバー・エドワーズとエリザベス・テンプルという女性の結婚は、彼の考える新しい民主的アメリカへの答えのように思える。

このようにウェジェナーは男女の結婚について何らかの意味づけを示している。しかしウェジェナーは「新しい民主的アメリカへの答え」について、いったいそれがどういうものなのか、という事は明らかにしていない。私がここで示そうとするのは、まさにこの点なのである。この問いに答えを出すために、私はなぜオリバーとエリザベスが結婚しなければならなかったのか、という点を考えてみたいと思う。二人の結婚にはどんな意味が隠されているのだろうか。

## 1. 旧価値観と新価値観の対立

作品の主人公はナッティ・バンポー(Natty Bumpoo)である。彼は混血であり、手には文明の利器であるライフルを持ちながら猟をするハンターである。

こうしたことから、ナッティが完全に旧社会、土着のアメリカ人とは言えないのかもしれない。しかし、彼は過去という旧に重きを置く人物である事は、紛れもない事実である。冒頭の第1章で、ナッティは減り続ける獲物に対して、テンプル判事(Judge Temple)に次のような不平を漏らす。

“ Ah! The game is becoming hard to find, indeed, Judge, with your clearing and betterments, ” said the old hunter, with a kind of compelled resignation. “ The time has been, when I have shot thirteen deer, without counting the fa’ns, standing in the door of my own hut. . . ” (22)

「ああ、獲物はほんとに少なくなってきただな、判事。これもお前さんがたの開墾や改良のせいだからなあ」年取った猟師はある種の追い込まれた諦めで言った。「俺の小屋の前で13頭もの鹿を撃ったこともあったがなあ、小鹿を除いてもよ・・・」

時代の変化により、自分の生業である猟が阻害されてきているのを嘆く発言である。「諦め」などの様子からもわかるように、彼は過去に重きを置いているが、抗いがたい新しい力によって、時代の先へ先へと追いやられている登場人物であると言えるであろう。ナッティは「ここでは、しばしば力が正義なり」(“ might often makes right here ”) (22)の圧力のもとに時代の流れに押し流されている人物である。彼の名前であるナッティは「不平を言う」の natter を連想させる語である。時代に対して好意的に思わない彼の様子を、名前が暗示しているとも考えられるのである。ナッティの属する旧の価値観は、新しい力との間に度々衝突を起こす。例えば、禁猟時期にもかかわらず鹿を仕

留めたことが結果的に、自分たちの不利益へとつながっていく事などである。テンプル判事の職業である判事は、法を代表する職業であり、新しい社会の価値観の代表的人物である。法により人々は権利を守られもするし、法により行動を制限され自由を奪われもする。ナッティの場合は法により行動に縛りがかけられ、自由を奪われていると言っているのではないだろうか。元々森の獲物に関しては、取っていい時期、駄目な時期という区別は存在しない。ハンターであるナッティは、獲物が居ればそれを撃ち自分のものにする、という自然のルールのもとに生きてきたのである。禁猟時期という法の制限は、ナッティのアイデンティティであるハンターの性格そのものにも深く影響を及ぼしているのである。ハンターが自由に獲物を取れない事、それ自体ナッティの不自由さを示す証拠となっているのである。

「ナッティ・バンポーとテンプル判事は同じ理屈に立ちながらも、対立する考えを同じ語において、つまり適法の、という語で表現している」(“ Natty Bampoo and Judge Temple stand upon the same ground and ground their opposing argument in the same term, legal ”)(81)とエリック・チェイフィッツ(Eric Cheyfitz)は説明しているが、この事はテンプル判事を代表とする新住民とナッティの行う猟の仕方においても見出すことが出来る。旧の代表であるナッティと新を表すテンプル判事たちの目的は、食料を得る為に獲物をとる、という時と所を超えて人類が普遍的に行ってきた自然法という点では一致している。しかし、この点において旧と新の性格の差が歴然としているのである。ナッティは食べる為にたった一羽の鳥を殺すにとどまる。彼に言わせれば、不必要で無駄な殺害は「邪悪な」(“ wicked ”)(247)ことであり、「神様は作りなされた自分の創造物が無駄にされるのを、放っておかない」(“ the Lord won't see the waste of his creatures for nothing ”)(246)と不快感を露わにするのである。新しい価値観の人々であ

る町の人間のやり方は、ナッティにとって虐殺としか考えられないのである。食料にする動物にさえナッティは敬意を表し、「役に立つように作られているのであり、壊されるためではない」(“made for use, and not to destroy”)(248)と考えているのである。

このハンティングの仕方の差は魚についても違いが見られる。町の間人は引網で大量に捕獲して「食料として無駄になる」(“lost as food”)(265)程に魚を殺すことになるのである。テンプル判事は、銚で魚をとるナッティに対して、そんなやり方は「恥」(“shame”)(265)とさえ言い切るのである。これに対してナッティは「そんな罪深い魚獲りのやり方に手を貸すつもりはない」(“I wouldn't be helping to such a sinful kind of fishing”)(265)とはっきり宣言し、町の人間の獲った魚を口にするのを拒むのである。獲物に対して深い精神性を見出すナッティと、単なる物質としか考えられない新住民との違いがはっきりする猟のやり方の差なのである。

クーパーがこうした猟のやり方に対してどんな評価を下しているのだろうか。少なくとも旧約聖書の記述の観点からすると、軍配はナッティ側にあがるものではないだろうか。旧約聖書によると、しばしば「殺し」は是認される。自らの存在の為に食料や道具の為にされる「殺し」は許される行為なのである。前もって計画された意図的な「殺害」は許されない事なのである。ナッティのやり方が聖書中の「殺し」にあたり、テンプル判事側のやり方が「殺害」にあたるのは、明白なことではないだろうか。鳥のハンティングのやり方に対してナッティに「お前はいいことを言う」(“Thou sayest well”)(248)とテンプル判事に言わしめたクーパーであるが、続く魚獲りの場面でテンプル判事のこの発言は、表面的な上辺だけの発言であるという事を明らかにするクーパーである。上辺だけを飾った俗物とも考えられるテンプル判事<sup>2</sup>のこの猟に対しての体裁と真意の差は、クーパーが考える旧社会と新社会への評価の差と

考えていいのではないだろうか。クーパーは明らかに旧社会へ賛成の意を表しているのである。紳士的な体面をもつテンプル判事であるが、そこには偽善と嘘が溢れている。猟のやり方においてクーパーは新社会の否を表現しているのである。

旧社会との比較が出来るのは、この箇所にとどまらない。ナッティは第1章において「この犬は大抵のキリスト教徒よか信頼できる。友をわすれねえし、恩を仇で返す事は決してねえ」(“ That dog is more to be trusted than many a Christian man; for he never forgets a friend, and loves the hand that gives him bread ”)(22)とキリスト教徒に対して皮肉めいた発言をしている。この何気ない発言が実は重大な布石となっているのである。クーパーが『開拓者』を書いた時代も、そして作品の舞台もまだまだキリスト教の影響が強かった時代である。ナッティと同時代人であるテンプル判事もクウェーカーというキリスト教徒である。こうしたクリスチャンであるテンプル判事が側の人間が、ナッティに対して行ったことはなんであろうか。それはナッティが口にする犬さえしない裏切り行為である。クリスチャンにはおおよそ相応しくない背徳の行為を旧の価値観の代表するナッティ達に新住民は行っているのである。

28章においてオリバーの同伴するという申し出を断りルイザ(Louisa)と共に山中を歩いていたエリザベスたちである。エリザベスがオリバーの申し出を断ったのは、当然の事であるような説明がこの章の冒頭にある。ここでその説明を引用してみよう。

Male attendants, on such excursions, were thought to be altogether unnecessary, for none were ever known to offer an insult to a female who respected herself. (302)

こういった遠足には、男性の付き添いはいらないと考えられていた。なぜなら、自尊心のある女性に対してよからぬちょっかいを出した者などだれもいなかったからだ。

エリザベスが断った理由をエドワーズと交わした気まずい会話のせいと考える事もできる場面である。しかし、引用部分が示す全知の視点からによる地の文の説明では、同伴者がいない理由とは、彼女がもっている自尊心であるとしている。尊敬すべきものには敬意を払うという風潮が、この土地には流れているらしい、という事を暗示している。この章では獰猛なパンサーの攻撃から、ナッティは2発の銃弾でエリザベスとルイザを救い出す、という展開になっている。尊敬すべきものには尊敬するという風潮があるらしいことを地の文で匂わせているが、実際にはどうなのであろうか。

この点においてもテンプル判事のキャラクターと同じように裏があるようである。治安判事であるハイラム・ドゥーリトル(Hiram Doolittle)に対しての暴行と家宅捜査への抵抗に対して罪を問われて、ナッティは33章で裁判にかけられることとなる。この二つの罪について、われわれ読者は、裁判をかけるには不当な理由である、ということがわかるはずである。ハイラムに対しての暴力を振るったといえども、それはナッティのいう様に70の老人が「彼の肩をちょっと手荒くつかんだ」(“took him a little roughly by the shoulders”)(364)だけの事である。この件については無罪の判決が下されるが、法という名の下に罪のない者を罰しようとする偽善的態度がみられるのである。裁判にかけること自体、不名誉なことと言えるのではないだろうか。家宅捜査への抵抗という罪により、有罪となるナッティであるが、我々はここに法という名を借りた裏切り行為、背徳の姿勢見て取ることが出来るのである。



法律を正しく理解していない者、ナッティに対して行った仕打ちとは何であろうか。100ドルの罰金、監獄への1ヶ月間の禁固刑という処罰を下すのである。

ナッティは「俺に法律の話なんかするな」(“Talk not to me of law”)(370)と必死に訴え、法ではなく「道理」(“reason”)(370)による判断を叫ぶのである。ナッティは自分で説明するようにテンプル判事の娘を救い、そしてテンプル判事が子供だった頃に、食料や毛皮を与えた恩人のはずである。ナッティはまさに、親切心と情けによりテンプル判事に対して尽くした人物なのである。テンプル判事の強調する法よりも、ナッティの強調する道理のほうが我々読者に響き、そして妥当性を持っているのは明らかなはずである。敬うべきものに対しては敬う、という風潮がここにはあるという様に上記の地の文が説明しているが、この説明は恩人であるナッティへの仕打ちを考えると偽善であるという事がわかってくるのである。ナッティという有徳の人物が行った道徳的行為に対する仕打ちは、クリスチャニティーの観点からしてもキリスト教徒らしからぬ教えに反する行為である。<sup>3</sup>「たいていのキリスト教徒より信頼できる。友をわすれねえし、恩を仇で返すことはけっしてねえ」という自分の犬に対する説明が、この裁判で一種の布石になっていた事が明らかにされるのである。テンプル判事は、キリスト教徒でありながら、ナッティという友を忘れ、親切さという恩を裁判という仇で返す事になったのである。法という仮面をかぶり背徳の行為を行うテンプル判事を代表とする新の力はウィリアム・デッカー(William Decker)が説明する「『開拓者』は原理と実際の矛盾をあらわす」(“The pioneers illustrates the contradiction between principle and practice”)(5)様子を如実に実証するものではないだろうか。ここまでの説明で明らかになったはずである。この作品には新の力によって圧力が加えられる旧の力、そして対立する旧と新のせめぎあい

があるのである。

## 2. 救うものとしてのエリザベス

以上のように新しい力に対立する旧の力、あるいは新によって搾取されてしまう旧という構図を我々は見て取ることができる。<sup>4</sup>しかし、クーパーはこうした両者の軋轢に対して救う力を用意しているのである。クーパーの活躍した時代には、政治の面でも歴史の面でも、そして文学の土壌の上でも女性は排他的な存在であった。シャーリー・サミュエルズ(Shirley Samuels)はこの事をクーパーの著作について当てはめて、次のように説明している。

The political and historical exclusion of women as writers and readers may relate to the novel's representation of women as characters, and, beyond that, the novel's elimination of women, and women bodies, from the sphere of history and its making. (101)

作者そして読者としての女性の政治的、歴史的除外は、小説における女性の登場人物作りに関係している。いやそれにも増して、文学史とその編纂の領域からの女性と女性の身体の排除と関係がある。

このようにサミュエルズは、文学における女性の周縁的存在を強調している。しかし、私はクーパー文学において女性の果たす役割は、無視できないものであると信じる。『スパイ』において女性の登場人物が果たす役割、この場合結婚という形をとり、クーパーの考える歴史観を表現するのに一役買っている。

またこの小説において、イギリスよりのキャラクターかアメリカよりのキャラクターかという事が描き分かれており、当時の世相をうまく表現しているとは言えないだろうか。『開拓者』においても女性であるエリザベスの果たす役割は、決して無視できない。ここではエリザベスの演じる救いとしての役割に注目してみることにする。

17章で七面鳥射的に興じるナッティ、ビリー・カービー(Billy Kirby)、オリバー、そしてこの射的の的である七面鳥の持ち主ブロム(Brom)である。カービー、オリバーはそれぞれ七面鳥を撃つことに失敗して、ナッティの放ったライフルは不発という結果になる。周りの人間は、「不発も発射と同じ」(“A snap good as fire”)(195)という結論に達してしまう。しかし、考えてみてほしい。二人の間には「怨恨とも言うべき張り合い」(“a jealous rivalry”)(191)があり、これを解消するために「ライフルの腕前について」(“on the point of skill with the rifle”)(191)競争を行っているのである。カービーが行った発射とナッティの不発は同じ土俵の上での戦いといえるであろうか。不発ではライフルの腕前は測れないはずである。黒人ブロムの連発する「フェアプレー」(“Fair play”)(193)とは明らかに反する競争となっており、一種の皮肉に感じられる。エリザベス自身ももう一度ナッティに一シリング出して、競走に参加する事を彼に促すが、彼女のこの行動は、ナッティの腕前を信用して、真のフェアプレーのもとに決着をつけて欲しいとの思いからの提案である。ナッティは結局、的である七面鳥を見事に撃ちぬきこの競争に勝つこととなる。「自分はこの件では、お嬢様の代理」(“I was her deputy in the matter”)(198)だから、七面鳥はエリザベスがもらうべきであると主張するナッティに対して、彼女は「レザー stockingの名だたる腕前を見たかっただけ」(“to see an exhibition of the far-famed skill of Leather-stocking”)(199)と受け取りを拒むの

である。彼女はこの射的のシーンにおいて、ナッティに対してのアンフェアな扱いに対しての助けとなり、ナッティの名誉を保つ働きをしているのである。またナッティの「お嬢様の代理」でやっただけだから、七面鳥はエリザベスのものであるという紳士の発言に対して、これに対応するように獲物を受け取らないという行為により、敬意のお返しをナッティにしたことになるのである。紳士の行為には敬意によってお返しをする、その結果ナッティの名誉が保たれるというエリザベスの働きである。「年老いたレザー stocking」(“old Leather-stocking”)(193)がアンフェアにより不名誉に陥ることを防ぎ、そして名誉によって獲得した獲物を名誉として取らせる、というのはエリザベスの示す救済的行為とっていいだろう。

エリザベスの果たす救いの役割はこれだけに留まらない。鹿を撃った罰金を科せられそうになるナッティに対して、エリザベスは「レザー stocking はいまや私の友人です」(“Leather-stocking, has now become my friend”)(343)として「ひどい目にあうことはない」(“no harm shall follow”)(343)と罰金の肩代わりをオリバーに約束するのである。助けてもらった恩に対して、今度は自分が返す番であるという義理の感情以上に、友人としての救助を申し出るのである。「私はあいつから尊敬という感情を抱かせられる事はなかったし、私に対してはいつも反抗的だった」(“I have never been so fortunate as to secure his esteem, for to me he has been uniformly repulsive”)(345)とナッティに関して個人的な感情を取り出して判事の職務を行おうとする判事とはまったく違う態度と言えるのである。たしかにテンプル判事は「彼のこれまでの態度によって罪が重くなることはない」(“his former conduct shall not aggravate”)(345)と述べるが、ナッティは自分への敬意が欠けているという説明を先にするこの発言によって、彼の公と私の混同の状況を見て取ることができるのである。法

を信条とするテンプル判事であるが、そこには隠れた私情のもつれが見られるのである。実際、娘の救助という恩を忘れてしまい、「もう私の力の及ばぬことで、どうしようもない」(“ it is now out of my power to avert it ”)(344)と言ってナッティの救助にさじを投げるのである。この行動は、日ごろからのナッティの判事に対する接し方、尊敬を払わないというその態度に起因する発言とあっていいだろう。このことは、極度に自分の名誉と敬意を強調するテンプル判事の性格からも明らかである。

このようなテンプル判事の態度とは違い、エリザベスの示す態度とは自分がたとえ不利益となっても恩を返すという利他的な精神によるものである。ナッティの件に関して自分にはわからない点がるとしながらも、「あの老人に不必要な心配をかけさせないで下さい」(“ Do not let the old man experience unnecessary uneasiness ”)(346)とナッティへ友人として愛情を示すのである。自分が恋心を抱くオリバーに対して自身の非力を匂わせながら、「もっと温情のある友人」(“ warmer friends ”)(346)を見つけてくださいと告げるエリザベスは、たとえ自分の恋が阻害されようとも、あるいは自分の及ばない力によって思った通りの結果がナッティに対して起こらなかったとしてもエリザベスの示すナッティへの助けというのは真実である、という証拠になるのである。ナッティという友人を助きたい、しかし自分は力及ばないかもしれない、こうした感情の結果が恋心を抱くオリバーに対してのこうした「もっと温情ある友人」を見つけて、という葛藤の言葉となって現れたのである。恋をする相手にすら、嘘を言わず自分の非力を正直に言う。そして恋の行方すら危ぶまれてしまう。こうした状況においてもエリザベスは、ナッティに対して友人として手助けをすることを約束するのである。彼女の示すこの友人ナッティに対する救いの感情は本物である、とすることができるであろう。

こうしたナッティの名誉の保持や恩に対する友人としての愛情という精神的

救いとしてのエリザベスは、第1章において既に象徴的に表現されている。第1章において撃った鹿<sup>5</sup>の所有に関して、テンプル判事とオリバーは名誉にかけて争う事になる。結果的に鹿をしとめたのは、オリバーであることがわかったのであるが、テンプル判事はオリバーの負った怪我にもまして鹿の所有を、金の力を使いながら殊更に求めるのである。オリバーは貧しい暮らしをしているのであり、テンプル判事の提案する100ドルとし止めた鹿の交換は喉から手が出るような魅力的な交換条件のはずである。しかし、オリバーは「すいませんが、私には鹿肉が必要なんです」(“Excuse me; I have need of the venison”)(25)と100ドルの受け取りを拒むのである。彼のこのときの様子は「まるで自らの弱さを内面で恥じるかのよう」(“as if withinward shame at his own weakness”)(25)顔を紅潮させるものである。奢り高ぶったテンプル判事が「声を低くして」(“lowering his voice”)(25), 「懇願する」(“entreat”)(25)のに、年下の若者がきっぱりと断り続け、怒りの様子をしめすこのシーンは決して穏やかで平穏な場面であるとは言えないであろう。しかし、エリザベスが作品に始めて登場し、「そんなに私の父を苦しめないで下さい」(“you would not pain my father so much”)(25-6)と発言した後のオリバーの様子を見てみよう。

Whether his wound became more painful, or there was something irresistible in the voice and manner of the fair pleader for her father's feeling, we know not, but the distance of the young man's manner was sensibly softened by this appeal, . . .(26)

傷が痛くなってきたのか、あるいは自分の父を思うこの美しい仲裁人の声に抗いがたい何かがあったのか、我々ははっきりわからないが、この訴えによって若者の敬遠的な態度は目に見えて和らいだ・・・

痛みを忘れるほど興奮していたオリバーはエリザベスの存在によって痛みを思い出し、そして態度すら軟化させるのである。このエリザベスの働きとは、オリバーとテンプル判事の緊張状態の緩和という役目を担っており、緊張と軋轢を解消するという双方にとっての精神面での救いとなるような働きをしているのである。このように第1章で既に、エリザベスの救済的役割というのは示されているのである。

このようにエリザベスは、作品中で名誉の保持や恩に対する恩返しとしての手助けというような精神面での救いを具現する人物であると言えることができるであろう。この精神的救いとしてのエリザベスは35章で具体的に追ってから逃げるオリバーとナッティに対して、荷車に乗せて牛を動かすという機転を提案して、逃亡者の二人を助けるという具体的行動となって表れるのである。

エリザベスは以上の説明で明らかなように新の力に対峙する旧の力の助けとなり、救うものとしての役割を果たしていることがわかるであろう。ナッティに対する名誉の保持、そして恩人に対する友人として示す愛情という救い、新の力のテンプルと旧に重きを置くオリバーの軋轢の解消という第1章における象徴的な精神面での救い、そして逃亡の手助けという具体的救いの役割。どのように考えてもエリザベスは救うものとしての役割を帯びているのである。

## 結論

Indeed, the urge to root out vestiges of the culture and

society of the Old World became so intense over the years that a communicator like the elder Henry James was led to identify democracy itself with a program of denial and destruction. (13)

実際、旧社会における文化と社会の痕跡の抹消の必要性は、数年のうちに激しくなったので、ヘンリー・ジェームズのような老練な時事的解説者は、民主主義と旧社会の否定と破壊を同一のものと考えるようになった。

これはR・W・ルイス(R.W.Lewis)が自身の書である『アメリカのアダム』(*The American Adam*, 1959)<sup>6</sup>の中で19世紀に見られる作品群について述べた一説である。「過去についての反省」(“case against the past”)(13)という言葉を使いながら、自身の論を展開しているが、クーパーの『開拓者』については上の説明があてはまるであろうか。前作『スパイ』においては、独立戦争時のアメリカ人によるアメリカ的価値観とイギリス的価値観の間で揺れる価値観を描いた。『スパイ』を執筆する頃になり、アメリカ人が感じ始めたイギリスへの憧憬、旧世界への憧憬を見事に表現したのである。ウィリアム・ケリー(William Kelly)もクーパー文学を評して、クーパーは「アメリカ人の二重意識についての洞察力に満ちた見解」(“an insightful meditation on the duality of American consciousness”)(43)を表現しているとしている。確かに『開拓者』においても旧社会と新社会の葛藤が描かれており、旧社会への完全な否定ではなく、一種の懐かしさ哀れみ、そして新社会へは期待を感じさせながらも、諸手を挙げての賛成というわけではない描き方をクーパーはしているようである。クーパーは歴史家としての考え方を作品において、何らかの形で表現していると考えるのは妥当なことであろう。



本稿において第1部では『開拓者』には新の力によって圧力が加えられる旧の力があることを示した。ナッティは旧の力の代表として新の力に対して様々な軋轢を生じさせている。そしてナッティ自身も新の力によって不利益を被っている登場人物ということを示した。第2部では、作品の女性登場人物であるエリザベスに注目して、彼女が担う救うものとしての役割を示した。エリザベスは新の力に対峙する旧の力に救いとなる役目を負っており、旧社会に対して救済的側面を持っていることを論文中で明らかにした。

そろそろここで、本稿の命題である、なぜオリバーとエリザベスは結婚しなればならなかったのか、という事に答えを出してみたいと思う。オリバーとエリザベスの結婚によって、新の代表であるテンプル判事と、彼により搾取された旧の力の子孫であるオリバーは和解することになる。オリバーはエリザベスの土地を所有することになり、新社会により不利益を被っていたオリバーはここでエリザベスとの愛情を契機に名誉と資産を回復して、そして新社会との軋轢の解消に成功することになる。この二人の結婚は9月に行われ、秋のはじめという事になる。第1章におけるクリスマス時期という冬において小説が始まり秋に終わる、という一年間のサイクル構成になっているのである。この初秋という終わり方は、クーパーが恣意的に設定したものではない。秋とは実りの秋であり、さまざまな果実、穀物が生み出される季節である。新時代への期待を感じさせる状況設定とも考えられるのである。そして二人の結婚により、当然のことながら、子供の誕生が期待されるべきことである。オリバーという搾取され続けてきた旧社会の人間が、エリザベスという新社会に身をおきながらも救うものとしての役割をもつ人間との結婚により、新しい命、新時代への期待が描かれているのである。オリバーとエリザベスの結婚は新と旧、それぞれの対立する力の和解を表すのである。二人の結婚が何を意味するかはっきりしたはずである。旧と新の和解、旧を生かしつつ新があるべきというクーパー

の歴史観を表しているのである。過去の否定ではなく、過去の遺産を生かしなが  
ら進んでいくべきであるというクーパーの歴史観を表すのに二人の結婚は必  
要であったのである。旧対新という二項対立ではなく、過去からつながる現在、  
そして未来という理想をこの二人の結婚により表現したのである。<sup>7</sup>

この論文中では示さなかったが、『開拓者』のタイトルの暗示する切り開く  
イメージ、時代の開拓と最終的にナッティの森への立ち去りをどう関連付ける  
か、ということは今後新たな研究の視座になりうるのではないだろうか。ナッ  
ティ自身を開拓者の先頭に立つ人物として論じることも十分考えられることで  
ある。「大陸を横断して進む国民のために、道を切り開く、開拓者の群れの先  
頭を行った」(“ the foremost in that band of Pioneers, who are  
opening the way for the march of the nation across the continent  
”)(456)の最終センテンスの表現するところは、意味深長な含意あふれる小説  
の締めであると言えるであろう。

## 後注

1. 本論文中、『開拓者』への言及は、James Fenimore Cooper, *The Pioneers*, ed. Donald A. Ringe に拠る。
2. 例えば、第1章においてオリバーとの鹿についてのやり取りを挙げる事ができるであろう。名誉という言葉にしがみつき、金で解決をはかるテンプル判事は真の意味で紳士とは言えない。旧友のエフィンガムの財産を、戦争を契機に火事場泥棒的に不当に奪ったこの行為は、昔からの名家、家柄のある人間には相応しくない事である。彼の出自はなりあがり的に獲得した地位であり、尊敬と格式による自然発生的な獲得に拠るものではない。いわゆるお里が知れる、という態度が作品中に点在している。
3. キリスト教において、特にカルヴィニズムの教義の中では聖書による信仰というものの他に、道徳を重視するというものがある。道徳的に正しい人間であること、は神の教えに相応しい、それゆえ「よい市民」(good citizen)になるために努力しなければならない、という伝統がある。裏切り行為は当然のことながら、道徳に反する行為であり、この点においてもキリスト教、キリスト教徒に対しての一種の皮肉を見出すことができる。「よい市民」に関連する思想は、Jonathan Edwards, Increase Mather などの初期アメリカの著述家の作品から脈々と伝わる思想の一つである

4. 旧に対する新の力という構図は他作品にも見られる特徴であるが、この事を彼の伝記的事実と関連付けると興味深い読みになるのではないか。父 William Cooper に対して親子として当然あるべき葛藤、父を乗り越えたい息子としての態度を作品の旧に対しての新の力と結びつけられないだろうか。『開拓者』を私の出す結論とは違う、旧を失いつつあるが新の力が前進していく、という楽観的歴史小説と読むことも考えられる。しかし、そこには父に対しての完全には拭いきれない愛情、古いものへの愛情が存在する。古きを失い乗り越えていくが郷愁もある、というのは、作品中に点在する失われゆくものとしての自然描写に関連付けが可能か。
5. 鹿はキリスト教、あるいは十字架を連想させる動物である。中世美術において鹿はしばしば、楽園を流れる川の側で喉を潤す動物として描かれる。この事によって、信仰の飢えを癒す洗礼をイメージさせる生き物として使われるのである。また鹿の角は、十字架を伝統的に表す。この鹿の役割に所有権の争いを、獲物に対してのやり取りと読む以上に、キリスト教的生き物を金により買収しようとするテンプル判事の姿に、宗教の世俗化、金による宗教の卑小化を見出すのは深読みであろうか。金は近代化の過程で、しばしばその代表的存在として登場する。時代が下り、例えば、Mark Twain の作品群、金メッキ時代といわれる作品群についてもこの傾向は顕著である。
6. 同書は出版後 50 年が経過するが、まだまだ影響力の大きい書である。19 世紀の作品についてかかれたものであるが、20 世紀以降の作品群についても応用の利くものである。例えば、『私のアントニア』などの

女性作家を論じる際に、過去への反省という態度から派生して過去への郷愁という事に言及する論文も見られる。または、出版の年1959年という年代にも注目して、同書がかかれた社会的背景と現代作品を関連付けて新たな出発点とすることも可能である。

7. この結論の着想は、同じアメリカロマン主義時代の花形とも言うべきホーソンによる『七破風の館』の分析から得たものである。ホーソンは少し時代が下るが、クーパーの作品がホーソンに強い影響を与えているのは想像に難くない。歴史家としてのクーパーと、歴史に対して懐疑的態度で著作にあたったホーソンには共通する部分が多々存在する。

## 引用·参考文献

- Cheyfitz, Eric. “ Literally White, Figuratively Red: The Frontier of Translation in *The Pioneers*. ” *James Fenimore Cooper: New Critical Essays* Ed. Robert Clark. London: Vision Press, 1985. 55-95.
- Cooper, James Fenimore. *The Pioneers*. Ed. Donald A. Ringe. London: Penguin Books, 1988.
- Franklin, Beard James. *The Writing of James Fenimore Cooper*. Albany: State University of New York Press, 1980.
- Hawthorne, Nathaniel. *The House of Seven Gables*. Ed. Seymour L. Gross. New York: W. W. Norton and Company, 1967.
- House, Kay. *Cooper's Americans*. New York: Ohio State University Press, 1965.
- Kelly, William P.. *Plotting America's Past*. New York: Southern Illinois University Press, 1983.
- Lewis, R. W. B.. *The American Adam*. Chicago: The University of Chicago, 1955.
- Nevius, Blake. *Cooper's Landscape*. Los Angeles: University of California Press, 1976.

- Philip, Gould. *Covenant and Republic: Historical Romance and the Politics of Puritanism*. New York: Cambridge University Press, 1996.
- Railton, Stephen. *Fenimore Cooper: A Study of His Life and Imagination*. New Jersey: Princeton University Press, 1978.
- Rans, Geoffrey. *Cooper's Leather-Stocking Novels: A Secular Reading*. Chapel Hill: The University of North Carolina, 1991.
- Ringe, Donald A.. *James Fenimore Cooper*. New York: Twayne Publishers, 1962.
- Robert, Levine. *Conspiracy and Romance: Studies in Brockden Brown, Cooper, Hawthorne, and Melville*. New York: Cambridge University Press, 1989.
- Samuels, Shirley. "Generation through Violence: Cooper and the Making of Americans" *New Essays on the Last of the Mohicans*. Ed. Daniel Peck. New York: Press Syndicate of the University of Cambridge, 1982. 87-114.
- Swann, Charles. "Guns Mean Democracy: The Pioneers and The Games Laws." Ed. Robert Clark. London: Vision Press, 96-120.
- Walker, Jeffrey. "Leather-Stocking Redux: An Introduction

Anew, and Anon" Leather-Stocking Redux.  
Ed. Jeffrey Walker. New York: AMS  
Press, 2011.

Wallace, James D. "Cultivating an Audience: From Precaution  
to *The Spy*" *James Fenimore Cooper: New  
Critical Essays*. Ed. Robert Clark.  
London: Vision Press, 1985. 38-54.

Waples, Dorothy. *The Whig Myth of James Fenimore Cooper*. New  
York: Yale University Press, 1968.